企画番号：３５

企画タイトル：琵琶湖に生息する外来魚の生態調査

1. 調査目的

琵琶湖には元々その地域に自然分布している在来種だけではなく、人為の影響によって本来の生息地域から、元々は生息していなかった地域に入り込んだ外来種が多く生息している。外来種は繁殖能力の高さや捕食量の多さにより、在来種に悪影響を与え琵琶湖の生態系を大きく変化させている。今回はブルーギルおよびブラックバスに焦点を当て、琵琶湖の湖東、湖南、湖西では食べているものに違いがあるのかを調査した。

2. 調査方法

調査方法を以下の 3 点にて示す。

① 琵琶湖博物館を訪問し、ブルーギルなどの外来種の観察をして外来種の生態について調べに行く。
② 釣りポイントを策定し、ブルーギルを釣る。
③ 何匹か釣った後に解剖を行い、胃の中身を確認する。この時、長時間魚を放置すると消化が進むのでなるべく早く解剖を行う。

調査機具: 釣り竿,魚肉ソーセージ,トレー，ポリ手袋，解剖セット(メス，ハサミ，へら，ピンセット，ルーペ)

調査地点: 瀬田川，矢橋帰帆島(湖南)，西の湖(湖西)，近江今津

3. 調査結果

琵琶湖博物館の訪問で、ブルーギルは北アメリカ原産で琵琶湖には昭和 30 年代に侵入し、甲殻類、稚魚、魚の卵等を食べることが分かった。また、群れをなして行動する。

図 1 に瀬田川、図 2 に瀬田川で釣れたブルーギルから出てきた藻および昆虫、図 3 に帰半島でブルーギルを解剖して出てきたトンボ、図 4 にエビのような物、図 5 に昆虫、図 6 に水草を示す。瀬田川では藻を食べていた。全長は 9 ㎝～16 ㎝である。矢橋帰帆島ではトンボ、藻、貝が出てきた。西の湖ではエビと思われるものや藻が出てきた。釣れた魚の数は帰半島では１４匹、湖西では９匹、近江今津では０匹であった。